

ヘボン式綴り方が近代の音声研究に与えた影響

— サ行子音・タ行子音を中心に —

内田智子（済州大学校）

要旨

近代以前の音声研究は伝統的音韻学の中で行われてきた。そこでは「五十音図」が重視され、全ての音は、音図の行を一単位としてシステマティックに記述されている。その中で現れたヘボン『和英語林集成』（1867）の音図は、五十音図にアルファベットを付したものだが、「シ」「チ」「ツ」等に同行の他の子音字とは異なる子音字を当てていた。これにより、五十音図の歪みが露呈し、それらの音に対する注目は、歴史的音声研究と結びついた。一方で、ヘボン式綴り方は日本語音の音声学的研究を進展させた。「シ=シャ行音」「チ=チャ行音」と分類した研究者たちは、「直音」「拗音」という伝統的概念の見直しを余儀なくされた。「わたり」「口蓋化」等の西洋言語学の概念を消化しながら、昭和初期の臨時ローマ字調査会では、議論がさらに深化し、日本独自の音声記述が完成した。

1. 近世の音声研究とヘボンの音図

日本における近代以前の音声研究は、主として伝統的音韻学の中で行われてきた。その考察の多くは「五十音図」に基づいて行われ、音図上の同行の5音は一つのグループとして認識され、記述されてきた。近世の国学から生まれた音義派は、五十音図上の「ウ段音」に「アイウエオ」を結合させることで全ての音が形成されると説いている。例えば「サ行音」は「ス+アイウエオ」という形で記述される。仮名文字が表示する全ての音は、音図の行を一単位としてシステマティックに示されている。

近世期の蘭学者は、五十音図に基づいたこのような音声分析を外国語学習に利用した。近世期の蘭学資料の多くが【図1】のようなアルファベット表記の「音図」を掲載する。

a	ka	sa	ta	na	ja	ma	ja	la	wa
i	ki	si	ti	ni	ji	mi	ji	li	wi
u	ku	su	tu	nu	ju	mu	ju	lu	wu
e	ke	se	te	ne	je	me	je	le	we
o	ko	so	to	no	jo	mo	jo	lo	wo

【図1】大槻玄沢『蘭学階梯』（1788）の音図（論文末【使用テキスト】pp.351-352より）

1 この図の下に濁音の表があるが、紙面の都合上割愛した。

蘭学の音図は、縦列に同じ子音字、横列に同じ母音字が並べられていることが特徴である。オランダ語の学習者は、母音字・子音字が組織的に配置された音図によって「母音」「子音」の概念を理解した。このような音図の出現は、仮名の音図では「母音」「子音」の分析的理解が困難であったことを意味する。蘭学から英学へと時代が移ってもアルファベット表記の音図は存在し続け、音素文字を使用する外国語学習において必要不可欠なものであったと推測される。そしてこのような音図による理解は、同行同子音、同段同母音という五十音図の整合性を強調する結果となった²。

しかし、ヘボン『和英語林集成』（初版 1867）の出版によって状況が一変する。【図 2】が『和英語林集成』に掲載された音図³である。

ア a	カ ka	サ su	タ ta	ナ na	ハ ha	マ ma	ヤ ya	ラ ra	ワ wa
イ i	キ ki	シ shi	チ chi	ニ ni	ヒ hi	ミ mi	イ i	リ ri	ヰ i
ウ u	ク ku	ス su	ツ tsu	ヌ nu	フ fu	ム mu	ユ yu	ル ru	ヱ e
エ e	ケ ke	セ se	テ te	ネ ne	ヘ he	メ me	ユ ye	レ re	エ e
オ o	コ ko	ソ so	ト to	ノ no	ホ ho	モ mo	ヨ yo	ロ ro	ヲ o

【図 2】ヘボン『和英語林集成』第 3 版（1886）の音図

（論文末【使用テキスト】Introduction より）

五十音図にアルファベットを付したという点は蘭学の音図と共通するが、蘭学の音図が「同行同子音字」であったのに対し、ヘボンの音図は「シ」「チ」「ツ」等において、同行の他のものとは異なる子音字を当てている。注目したいのは、ヘボンの音図が「発音の表示」を目的としている点である。【図 2】は『和英語林集成』Introduction の The Japanese Syllabary に掲載されているが、そこには、次の記述がある。

The Japanese syllabary consists of seventy-two syllabic sounds, and including the final ン, of seventy-three.

また、【図 2】の説明にも「the fifty sounds」の語があり、sounds という語の使用から、「発音の表示」を意図した図であることが分かる。蘭学の音図とヘボンの音図は、ともにアルファベット表記の五十音図の形をとっているが、蘭学の音図が「母音・子音の概念の理解」に使用されたのに対し、ヘボンの音図は「日本語の発音の表示」を目的としている点を押さえておきたい。

平井昌夫（1948）『国語国字問題の歴史』では「この字典のすばらしい売行と共に、それに用いられたつづり方が普及した」（pp.262-263）とされ、菊澤季生（1931）『国字問題

²蘭学者たちの中には、「サ行のシ」「タ行のチ」等について、同行の他の子音と異なることを指摘している者もいるが、それを音図には反映させていない。蘭学者の音声分析に関しては、内田智子（2015）「蘭学者の音声分析と五十音図」（『日本語の研究』11 卷 3 号）を参照されたい。

³本稿では、後への影響を考慮し、『和英語林集成』第 3 版の綴り方に基づいて考察を行う。第 3 版の綴り方は、明治 18 年に羅馬字会が決定した「羅馬字にて日本語の書き方」に従ったもので、以後ヘボン式ローマ字と呼ばれ普及した。

の研究』でも以下のように述べる。(一重下線は筆者による。以下同じ)

此時に當つて、かの J.C.Hepburn 氏が、和英辞書としては頗る優れた「和英語林集成」(Japanese and English Dictionary) (Shanghai,1867) を出版したために、この書のすばらしい普及と共に、これに用ひられた綴り方も次第に普及する事となり、その著者の名を冠して、「へボン式」なる名称が喧伝せられるに至つたのである。

(pp.127-128)

『和英語林集成』の流布に伴い、英学資料掲載の音図も「同行同子音字型」から、「へボン式」へと変化することとなる。

同行同子音の五十音図観が共通理解であった時代に出現したこのへボンの音図こそが、その後の近代の音声研究を進展させる原動力になったと筆者は考える。へボンの音図において同行同子音字でないものは「サ行」「タ行」「ハ行」「ヤ行」「ワ行」である。以下では特に「サ行」と「タ行」を中心に、へボン式綴り方が近代の音声研究に与えた影響を見ていきたい。

2. 歴史的音声研究

「サ行音」「タ行音」に関する歴史的音声研究は、上述したへボン式綴り方の音図が契機となったと推測される。問題となったのは、この音図において、「シ」「チ」「ツ」が同行の他の子音字と異なるという事実である⁴。

2.1. 日本人による研究

まず、大島正健(1898)『音韻漫録』の「タチツテト古音考」の記述を見たい。大島は韻鏡研究者として有名な人物であるが、伝統的音韻学にアルファベットを導入することで以下のような記述を行った。

タチツテトは、元来、母韻 a,i,u,e,o,と、父音 t と合してなれる音なれば、正式の組立にしたがへば、無論 ta,ti,tu,te,to なるべきを、今の音、チツの二字羅馬字にて表はせば chi,tsu の響なるは、甚だ怪むべし。此二音古より然りしか、将、中世以後の転音なるか、特に研究を要すべき事なりとす。

(p.97)

この記述がへボン式綴り方の音図の表記によっていることは明らかである。ここでは、五十音図は同行同子音であるべきという前提、へボン式の音図がそれに反するという事実から、タ行音の古音推定を試みている。サ行の子音に関しては、「シ」をアルファベットで【shi】と書く(以下、特に表記を問題とする時は【 】を使用する)ことを示し、方言音

⁴ 『和英語林集成』において、「シ」「チ」「ツ」の表記は、初版では【shi】【chi】【tsz】、再版・第3版で【shi】【chi】【tsu】となっている。同行の他の子音字と異なる文字を使用している事実は初版から見られる。本稿では、当時において影響力を持っていた綴り方「サ行」=【sa, shi, su, se, so】、「タ行」=【ta, chi, tsu, te, to】に基づいて論を進める。

等から「我佐行の父音の古音を考ふるに（中略）佐行拗音の方を古音と見ること適當なるべし」（『音韻満録』p.5）と結論づける。サ行はヘボン式の音図によれば【sa shi su se so】と表記されるが、「佐行拗音の方を古音と見る」という表現から、【s】ではなく【sh】で表記される音が古音であるという認識が読み取れる。

時代が下り、『日本文学大辞典』（1933）「五十音図」の項には以下の記述がある。

サ行のシ、タ行のチ・ツは、理論から云へば、si・ti・tu であるべきであるが、今は shi (ji)、chi (tji) tsu となつて、例に合はないが、古くはチ・ツは ti tu と発音した（「シ」の古音は、si か shi かまだ明かでない）。

（橋本進吉執筆）

この記述において橋本は、シ・チ・ツのヘボン式アルファベット表記が五十音図の「理論」に合致しないことに注目し、タ行の古音が音図の「理論」通り ti, tu であったと述べている。また、アルファベット表記が五十音図の組織に合致しない「シ」の古音は si か shi か未判明であるとしている。ここで注目すべきは、提示された「シ」の古音の選択肢が【si】で表示される音と【shi】で表示される音の二種しかなく、それ以外の可能性は排除されているという点である。

以上のように見てくると、サ行音、タ行音の古音の問題は、ヘボン式の音図において、音図の組織に合致しない音に対する注目が契機となったといえよう。

2.2. 外国人による研究

外国人研究者の間では早くから日本語古代音の復元が試みられていた。彼等も「アルファベットによる日本語音の表記法」を出発点として古代音の復元へと向かう。

Ernest Satow (1879) *On the Transliteration of the Japanese Syllabary* では、アルファベットで五十音図を表記したとき、サ行の子音字が「シ」のみ【sh】（他は【s】）であることに對し、次のように述べる箇所がある。

Some think that it should be *si*, for the sake of uniformity with the rest of the series, or because we may suppose that to have been the ancient or original sound of the syllable.

タ行もヘボンと同様【ta chi tsu te to】で示される。「チ」「ツ」について以下の記述がある。

But a love of theoretical uniformity has led a few scholars, especially those of the Instituto di Studij Superiori in Florence, to write ti and tu for the two signs チ and ツ; possibly on the ground that these signs were anciently so pronounced, chi and tsu being, according to them, modern corruptions.

Satow の記述を受け、Edkins が *On the Japanese Letters "CHI" and "TSU"* (1880) で、漢字音、モンゴル語・韓国語等との比較から、古代のタ行子音は【t】で示される音であると

結論づける。Chamberlain&Ueda(1888) *A Vocabulary of the Most Ancient Words of the Japanese Language* は Edkins に賛同し、『上田万年 言語学』(新村出筆録の講義ノート)には「チ chi ツ tsu 古クハ ti, tu」(p.152)の記述が見られる。

これらの記述からは、外国人研究者も五十音図を重視していることが分かる。五十音図上で同行同子音字でないものを原点とし、古代音と関連付けた記述を行っている。「サ行子音」「タ行子音」に関する歴史的音声研究は、英語の発音と表記に基づいた五十音図が契機となったといえるであろう。

3. 日本語音に対する音声学的研究

ヘボン式綴り方に基づく音図の「サ行」「タ行」における子音字の不統一は、従来組織的だと考えられてきた「サ行」「タ行」の内、「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性を認識させ、日本語音に対する音声学的認識をも生み出した。従来「明治以後、西洋の音声学やヘボン式ローマ字の影響で、五十音図にとらわれない音声学的認識が生じた」⁵と評されるが、その実態は明らかにされていない。以下では、その影響の具体的内容を考察する。

3.1. 「シ」「チ」「ツ」と「拗音」

ヘボン以前の近世の研究において、「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性に言及したものはほとんど見られない⁶。ヘボン式綴り方の音図によって「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性が認識され、これらの子音の考察の中で「シ」を「シャ行音」、「チ」を「チャ行音」として捉える記述が現れる。

青木輔清編述(1886)『英学童子解』初編の「羅馬字ニテ日本語ヲ綴ルノ解」には以下の記述が見られる。

s サスセソノ音ヲ生ズ sa サ su ス se セ so ソ
t タテトノ音ヲ生ズ ta タ te テ to ト

(p.10 より関連部分のみ抜粋)

「シ」「チ」「ツ」については、「子字二箇ト母字一箇トヲ以テ組立タル短音次ノ如シ」として挙げられる。

sha シャ shi シ shu シュ sho ショ
cha チャ chi チ chu チュ cho チョ
tsu ツ

(p.12 より関連部分のみ抜粋)

「シ」を「シャ・シュ・シヨ」、「チ」を「チャ・チュ・チヨ」と同類のものとして捉えて

⁵ 『国語学研究事典』「子音」の項(加藤正信執筆)

⁶ 内田智子(2015)でも触れたが、蘭学者の前野良沢、大槻玄沢、中野柳圃らはこれらの特殊性に言及している。

いることに注目したい⁷。日本語音をアルファベットで表記するにあたり、「シ」や「チ」の子音が「シャ・シュ・シヨ」「チャ・チュ・チョ」と同じ子音を持つことが指摘されたわけである。このような認識は近世には見られず、ヘボン式綴り方によって出現したものとされる。

このような分類は、岡倉由三郎（1897）『日本文典大綱』で音図の形でまとめられる⁸。

s	サ	スイ	ス	セ	ソ
sh	シャ	シ	シュ	(シエ)	シヨ
t	タ	(トイ)	(トウ)	テ	ト
ch	チャ	チ	チュ	(チェ)	チョ
ts	[ツァ]	(ツイ)	ツ	(ツエ)	(ツォ)

(p.23 より関連部分のみ抜粋)

「シ」＝「シャ行」、「チ」＝「チャ行」、「ツ」＝「ツァ行」と捉えている。この捉え方が普及するに伴い、従来「直音」とされてきた「シ」「チ」「ツ」を、「拗音」と見る認識が出現する。高賀詠三郎（1907）『発音と口語』は「シ」「チ」「ツ」を「拗音に属する音」（p.19）とし、三矢重松（1908）『高等日本文法』では「やや拗音の如く発せられ」る音（p.12）とする。前掲の大島の「サ行拗音」という表現も同様である。

ここで重要なのは、これが日本人独自の分類法であるということである。ヘボンの『和英語林集成』に「拗音」という概念は存在しない。和英の部に【sha】【shi】【shu】【sho】、【cha】【chi】【chu】【cho】等で始まる日本語の単語は見られるものの、それらを同類の音節としてシステムティックに捉えることはない。「シ＝シャ行」「チ＝チャ行」「シ・チ・ツ＝拗音」といった捉え方は、伝統的音韻学で使用されてきた音図や概念に、ヘボン式綴り方を導入したことで得られた新たな認識である。さらに世界に目を向けたとき、国際音声学会の発足が1886年、IPAの初版は1888年であり、ここまで扱ってきた音声研究がIPA整備前の段階であることも強調しておきたい。

ヘボンの音図で示された「シ」「チ」「ツ」の音の特殊性は、日本人によって「拗音」という形で捉えなおされ、新たな組織化が行われた。従来「直音」とされてきたものが「拗音」に組み込まれたことは、音声研究の歴史において画期的なできごとであったと思われる。この後、音声研究は「直音・拗音の対立」という伝統的概念の見直し、「拗音」の定義をめぐる議論へと展開してゆく。

3.2. 「拗音」と「わたり」

従来「拗音」の定義には様々なものがあつたが、共通して言えるのは、「シャ・シュ・シヨ」「チャ・チュ・チョ」が「拗音」であるということである⁹。

⁷ 「ツ」が単独で取り上げられているのは同類と考えられる「ツァ」「ツォ」等が一般的な日本語音と認識されていなかったためと思われる。なお、これらの記述は、羅馬字会が1885年に発表した「羅馬字にて日本語の書き方」の影響を受けたものと思われる。

⁸ () は日本語に存在しない音、[] は日本語で口語のみに使用される音。

⁹ 「ツ」と同グループと認められた、「ツァ・ツイ・ツエ・ツォ」に関しては、従来日本語音として考察されてこなかった。英語研究編輯所編（1909）『ローマ字の話』に「これ等の音は余り日本語

当時、西洋言語学の輸入に伴い、伝統的な概念である「拗音」を西洋言語学的に説明する試みがなされた。亀田次郎（1909）『国語学概論』は以下のように述べる。

今日の見方よりいへば、この拗音には、二種類あり。一は、音の口蓋化といふ事を意味し、一は、音の唇化といふことを意味するなり。尚詳言すれば、五十音中、又はその他種々の子音、例へば k, s, sh, t, n, h, f, p, m, r, 等が母音と接合するに際して、其間に口蓋の摩擦音 y (ヤ行の子音) が入り来るか、或は両唇の摩擦音 w (ワ行の子音) が入り来るに依りて聞かるゝ音が、即ち所謂拗音なり。

(p.146)

この考え方によれば、拗音¹⁰とは「音の口蓋化」であり、子音と母音との間に「摩擦音 y」の介入が認められる音である。

しかし、ここでへボン式綴り方が再び問題として現れてくる。従来拗音とされてきた「シャ・シュ・ショ」「チャ・チュ・チョ」等は、へボン式綴り方において【y】の文字が入らないのである。

神保格（1925）『国語音声学』の記述を見たい。

従来いふ拗音なるものを全体見渡して考へると、音の性質から云つて皆同じではない。きゃ、ぎゃ、にゃ、ひゃ、びゃ、びゃ、みゃ、りゃだけは或単一な子音から i 音（又は子音的 i）を経て母音に移るといふ点で同一である。しかし、「しゃ」「じゃ」「ちゃ」「ぢゃ」は全くちがふ。「しゃ」は fa で単純な子音である。故に普通の人々は f と i との連結「し」は単純な音（通常「直音」といふ）であつて拗音でないと思つてゐる。「ぢゃ」は tfa で何等 i を経て母音に移るといふ性質をもつてゐない。これ等を拗音の中に入れるのは仮名で「や」の字を附加へて「しゃ」「ちゃ」等と書く所から来たのである。

(p.124)

神保は「拗音」の多くに、子音が「j 音を経て」母音に移るといふ性質を認める。亀田の言う「y の介入」である。この「j 音」を佐久間鼎（1929）『日本音声学』は「わたり」と呼ぶ。神保は一方で「シャ」「チャ」等には「わたり」がないことを主張し、「要するに拗音とは不適當な名称である」（『国語音声学』p.125）と述べている。「拗音」の特徴として「わたり」の存在を挙げるなら、「シャ行音」「チャ行音」等は拗音でないというのである。神保の記述は、『和英語林集成』等アルファベットで日本語音を表記したものにおいて「キャ」「ニャ」等が【kya】【nya】であるのに対し、「シャ」「チャ」等は【sha】【cha】のように【y】の文字が記されないことから導き出された結論であると推測される¹¹。佐久間はこの考え方を「音字に捉われたもの」として批判する（『日本音声学』p.243）が、当時の言語学者たちで神保と同様の説を採る者は多い。

には遣はれぬ」(p.29)とあり、前掲の岡倉由三郎『日本文典大綱』の表でも括弧付きの表記である。

¹⁰ 論点を明確にするために、以下では合拗音に関しては扱わないこととする。

¹¹ IPA の影響も考えられるが、西洋式綴り方が根本にある点は共通する。へボン式綴り方と IPA の関係性、及び、それらが日本語研究に与えた影響に関しては今後の課題としたい。

へボン式綴り方を伝統的音韻学に適用したことにより成立した「シ」=「シャ行音」、「チ」=「チャ行音」の認識は、伝統的な「直音と拗音の対立関係」を崩壊させ、概念それ自体の見直しへと展開したのである。

4. ローマ字論争

前節までで問題となった「直音」と「拗音」の関係は、当時勢力を持ちつつあったローマ字論の中で議論されることとなる。以下では、1930年から1936年にかけて文部省の要請の下で行われた「臨時ローマ字調査会」における「へボン式¹²」と「日本式」の論争を扱う。この論争はローマ字による日本語の表記法の制定を目的としたもので、論争の結果「日本式」が勝利し、1937年に訓令式という形で制定される。調査会での議論の大半は日本語音に対する考察に費やされている。この調査会には、当時国語学者・言語学者として活躍していた新村出、岡倉由三郎、神保格、菊沢季生、保科孝一、藤岡勝二等が参加しており、ここでの議論は当時の学界における音声学的認識を反映していると考えられる。

4.1. 「シ/シャ行」と「ニ/ニャ行」の関係

「へボン式」は『和英語林集成』を原点とする発音表示型の綴り方、「日本式」は同行同子音字を基本とした五十音図に基づく綴り方である。調査会において問題視されたのが、「サ行音」と「シャ行音」の表記である。それぞれの表記を以下に示す。

	サ シ ス セ ソ	シャ シュ ショ
へボン式	sa shi su se so	sha shu sho
日本式	sa si su se so	sya syu syo

へボン式は、サ行のうち「シ」のみをシャ行の子音と同一のもの【sh】とみなし、表記に反映させる。一方日本式は、サ行子音を全て【s】、シャ行子音を【sy】とする。

日本式からへボン式への批判は「シ/シャ行」の関係と「ニ/ニャ行」の関係を論点として行われる。以下に「ナ行」と「ニャ行」の関係を示す。

	ナ ニ ヌ ネ ノ	ニャ ニュ ニョ
へボン式	na ni nu ne no	nya nyu nyo
日本式	na ni nu ne no	nya nyu nyo

「ナ行」と「ニャ行」の表記はへボン式も日本式も同じである。これに対し日本式から以下の発言が出る。

日本語で「貸シ」の「シ」が「シャ行」にあるといふならば、「死ニ」の「ニ」だつて同じ程度に於て「ニャ行」にあることは、次回の神保委員の御説明を聞くまでもないことであります。
(調査会第7回 福永恭助の発言)

¹²調査会の中では「標準式」とも呼ばれる。

「シ」と「シャ行」の関係は「ニ」と「ニヤ行」の関係と同じであると主張している。ヘボン式で「シ」を「シャ行子音」を使用して【shi】と書くのであれば、「ニ」も「ニヤ行子音」を使用して【nyi】と書くべきであると批判する。日本式論者は、「シ」の子音と「シャ行子音」の同一性を認め、同様に「ニ」の子音と「ニヤ行子音」の同一性を確信していたが、あえて表記には反映させないという立場である。日本式論者は、ヘボン式論者が「シ／シャ行」の表記にはこの事実を反映させ、「ニ／ニヤ行」の表記には反映させていないという「不統一性」を批判したのである。ヘボン式論者の表記については、日本式論者から「日本語の「ニ」と云ふ音は英語にない、それだけの理由でかうなつて居るのである」（調査会第3回 田丸卓郎の発言）と評される。

それに対し、ヘボン式論者であった神保格は、「ニ」について「n の口蓋化された ñ と i との連結を表す」（『国語音声学』p.112）と述べる一方で、「シ」については「s の口蓋化した ś を含む śi という連結を表さない。いはゆる拗音のしゃに含まれる子音」と i との連結を表すことになってゐる」（『国語音声学』p.111）とする。安藤正次（1927）『言語学概論』、金田一京助（1932）『国語音韻論』等にも同様の記述がある。つまり、「シ」の子音は「シャ行子音」と同じであるが、「ニ」の子音は「ニヤ行子音」とは異なるという立場である。

現代音声学においては、「シ」の子音が「シャ行子音」[ʃ] で示されるのと同様に、「ニ」の子音は「ニヤ行子音」[ɲ] と同価であるとされる¹³が、この現象は当時、『音声学協会会報』に数回指摘があるものの、それ以外ではほとんど注目されていない。日本式論者によって、従来の音声分析が英語に基づいた分析である可能性が指摘され、アルファベットの限界が示された意義は大きいであろう。

4.2. 「直音・拗音の対立」と「口蓋化」

上記の日本式の主張をヘボン式は認めないまま議論は続行される。次に問題となったのが「タ行」と「チャ行」である。

	タ チ ツ テ ト	チャ チュ チョ
ヘボン式	ta chi tsu te to	cha chu cho
日本式	ta ti tu te to	tya tyu tyo

日本式論者は、前述の「シ／シャ行」と「ニ／ニヤ行」の並行性は、「チ／チャ行」においても同様であるとする。日本式は、同子音であるのに「ニ／ニヤ行」のみにそれを反映させないヘボン式を批判する。一方でヘボン式論者は「シャ行」「チャ行」には【y】の文字を使用しない。シャ行音・チャ行音に「わたり」がないことを主張し、「わたり」がないためその拗音表記に【y】の文字を入れる必要はないと唱える。この点に関しては、最終的に、理化学研究所と航空研究所による「実験」が行われることとなり、全ての拗音は「子音+y+母音の連続である」という結論が出た。「シャ行音」「チャ行音」に関しても「わたり」の存在が認められたことにより、ヘボン式の主張が英語的な音声分析であったことが

¹³ 『国語学辞典』「鼻音」の項（野村正良執筆）

判明し、伝統的な「直音」「拗音」という分類の妥当性が示された。

3節を踏まえてローマ字論争を見ると、最後の問題は「シ」「チ」の拗音性である。日本式論者も「シ」「チ」の子音が「シャ行」「チャ行」の子音と同一であることを認めており、この点においてヘボン式論者と認識を共有している。ただ、日本式論者は、日本語のシステムという観点から従来分類システムを保持すべきであるという主張であり、音声を表記に反映させる必要はないとする点でヘボン式論者と意見を異にする。

ここで従来直・拗の対立保持のために日本式論者が「口蓋化」という概念を導入する。音図上の「イ段音」の子音は全て「口蓋化」とあるという見解を出したのである¹⁴。従来、イ段音の子音の口蓋化は指摘されていたが、前述の神保のように「シ」「チ」のみを別格扱いする研究者は少なくなかった。日本式論者も「タ・テ・ト」の子音と「チ」の子音の関係には、口蓋化に加え「摩擦音の介入」を認める。しかし同時に「キ」も「口蓋化」に「摩擦」が加わることを指摘し、「ヒ」の口蓋化と摩擦音の介入についても議論された。イ段音の子音を「口蓋化」とみなせば従来通りの分類で不都合はないという結論に至り、「直・拗」の対立は保持されることとなった。

5. まとめ

以上、五十音図が同行同子音だと考えられてきた時代に出現したヘボンの音図が、五十音図の歪みを露呈し、近代の音声研究に大きな影響を与えてきたことを述べた。

日本人によって行われた「サ行音」「タ行音」に関する歴史的音声研究は、ヘボン式綴り方の音図に触発されて始まった。外国人研究者の研究も、アルファベットを五十音図に付すことによって、同行同子音字ではない箇所への注目から開始されている。

同行同子音ではない箇所への注目は、日本語音に対する音声学的研究をも導いた。「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性はこれらの音を「拗音」に分類させ、伝統的な「直・拗の対立」の見直しを余儀なくさせた。「わたり音」「口蓋化」の概念を導入しながら、臨時ローマ字調査会ではこれらの議論がさらに深化された。ヘボン式綴り方は近代の音声研究を進める原動力であったが、佐久間の言うように「国語の音声に対する間違つた見解を流布した罪も少くない」。IPAの導入以降もヘボン式綴り方にとらわれた音声分析が行われてきたわけだが、このような中で行われたローマ字論争は、当時の日本語音声研究を、英語の音声学

¹⁴佐久間鼎（1929）『日本音声学』はこの見解を採っている。

国語における「まへのし」または「口蓋化」は、口蓋的（前顎的）母音の口腔内調音に適應するための先行音の変化といふ意味で、この種の母音は東京語にあつては「イ」（音字 [i] をあてて）である（中略）従来「シ・チ」や「ジ・ヂ」の場合だけが特に留意されてゐながら、国語における「まへのし」の現象がその全体における著しさを看過されてゐたのは、音声研究者がはの手落であらう。（pp.221-223）

外山高一も「口蓋化」の語は提示しないものの、イ段音全てにわたりの存在を認め、イ段音を統一的に説明しようとする。

私の考では、上記の通り、ヤ行のイ音が単独に使用される事は至て稀であつても、此音は決して不用の音ではなく、否寧ろ意外に其使途多く且つ必要欠くべからざる音であると思はれるのである。即ち、ア行のイ音及びワ行のキ音とを除いた其他の第二段階の諸音には Vocal として、ア行のイ音が付いて居るのでなく、ヤ行のイ音が付いて居るのであると思ふのである。故にキ（ギ）シ（ジ）チ（ヂ）ニヒ（ビビ）ミリの諸音は次の如く書き表はされるのである。

kji (gji) sji (zji) tji (dji) nji hji (bji pji) mji rji (仮りに斯く書き表す)
然し音の構成上よりは、例へば、キ音は kj+i に非ずして k+j+i である。以下、其他の第二列の諸音も、此例に習ふのである。（『音声学協会会報』第8号（1928）「ヤ行のイ音に就て」）

に基づいた研究から解放するという役割を担ったといえよう。

6. おわりに

本稿では、へボン式綴り方の音図で同行同子音字ではないもののうち、「サ行」「タ行」を取り上げて考察を行った。へボンの音図では他に「ハ行」「ヤ行」「ワ行」の子音字が統一されていない。「ハ行」の「フ」の子音字【f】は、古代音の研究に貢献した一方で、唇歯音であるという誤解も導いた。音声学的研究でも「ハ行子音」は問題視され、ローマ字論争においても論点となる。「ヤ行」「ワ行」については、仮名遣い問題に始まり、近世から議論されてきた¹⁵が、「へボン式綴り方」と「五十音図」によって完全な発音問題へとシフトした。アルファベットによって子音の抽出に成功した近代の研究者は、ヤ行音・ワ行音の変遷を「子音の消滅」という形で表現している。また、へボンの「シ」「チ」「ツ」の表記は、その濁音にも目を向けさせた。近世仮名遣い問題として捉えられてきた四つ仮名の混同は、歴史的音声研究の進展に伴い、清音との関係で議論されるようになる。これらについては稿を改めて論じたい。

使用テキスト・参考文献

- 青木輔清編（1886）『英学童子解』初編（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 安藤正次（1927）『言語学概論』早稲田大学出版部
 英語研究編輯所（1909）『ローマ字の話』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 大島正健（1898）『音韻漫録』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 大槻玄沢（1788）『蘭学階梯』（岩波思想体系 64『洋学 上』所収）
 岡倉由三郎（1897）『日本文典大綱』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 落合直文（1999）「語法摘要」（2003年復刻版 大空社）
 亀田次郎（1909）『国語学概論』博文館
 菊澤季生（1931）『国字問題の研究』岩波書店
 金田一京助（1932）『国語音韻論』刀江書院
 高賀詠三郎（1907）『発音と口語』（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 佐久間鼎（1929）『日本音声学』（1963年復刻版 風間書房）
 神保格（1925）『日本音声学』明治図書
 新村出筆録（1975）『上田万年 言語学』教育出版
 外山高一（1928）「ヤ行のイ音に就て」（『音声学協会会報』第8号）
 橋本進吉（1949）『文字及び仮名遣の研究』岩波書店
 平井昌夫（1948）『国語国字問題の歴史』昭森社
 J.C.へボン（初版 1867）『和英語林集成』（第3版（1886）「講談社学術文庫」を使用）
 前野良沢（1785）『和蘭訳筈』（岩波思想体系 64『洋学 上』所収）
 三矢重松（1908）『高等日本文法』明治書院
 臨時ローマ字調査会（1936-1937）『臨時ローマ字調査会議事録』上・下
 羅馬字会（1885）『羅馬字にて日本語の書き方』羅馬字会

¹⁵釘貫亨（2007）『近世仮名遣い論の研究』（名古屋大学出版会）に詳しい。

Chamberlain&Ueda (1888) *A Vocabulary of the most Ancient Words of the Japanese Language* (TASJ vol.16)

Edkins (1880) *On the Japanese Letters "CHI" and "TSU"* (TASJ vol.8)

Ernest Satow (1879) *On the Transliteration of the Japanese Syllabary* (TASJ vol.VII)

国語学会編 (1955) 『国語学辞典』東京堂出版

佐藤喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』明治書院